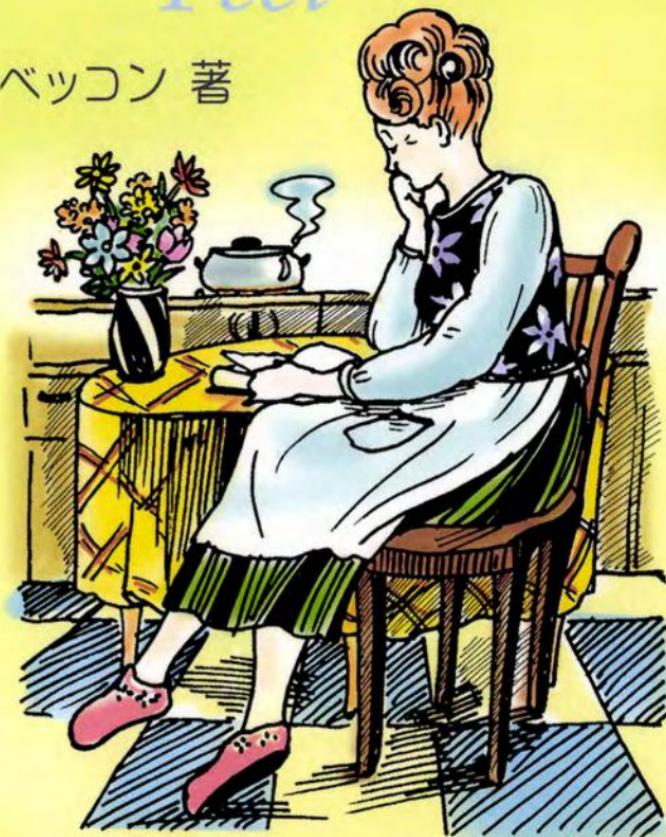


足もとにすわって

*Sitting at
His Feet*

Madge Beckon

M. ベッコン 著



足もとにするわって

*Sitting at
His Feet*

M. ベッコン 著

Madge Beckon

足もとにするわって

M.ベッコン著

伝道出版社

目次

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	女性実業家	68
自転車のあかり	チッポラ	おみやげ	しもべ	リベカ	もはや悲しげではない	手をのばしてその尾をつかめ	美しい盗人たち	七面鳥も	逃げなさい	真理はあなたを自由にする	女性実業家	68	
103	100	97	94	91	88	84	81	78	74	71	68	とびらを閉めて	32
43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	失 望	母
私の経験より	主よ、どこにおられましたか	識別力	ラハブ	貧乏人	ルデヤ	神様のテープレコーダー	王の前に立ったエステル	レア	ア	ア	ア	とびらを閉めて	32
142	139	136	133	130	127	123	120	116	112	109	106	失 望	母

序にかえて

私はもう十三年間、みことば誌のために「婦人メモ」を書かせていただきました。それはたのしいことでしたが、書くに先だって私が味わったさまざまな経験はそのすべてがたのしいものではありません。私がある事について書こうとすると、決まったように、自分でその真理を味わう事態が起ころうです。ある晩、私は声に出して主に訴えました。「一度だけでも、この道を通らないで原稿を書くことがゆるされないでしょうか」と。けれども、この多くの経験によつて、私はなお深く主との交わりを味わうことができました。

私の英文を日本語に訳してくださった井本弘兄をはじめ、伝道出版社のみなさん、またいろいろな面で援助してくださった高崎集会の多くの友人に心から感謝したいと思います。この兄弟姉妹の協力がなかつたら、この本はできなかつたでしよう。

この本を読んで、気落ちした人がひとりでも慰められ、弱った手が一つでも強められ、疲れはてた人がまた元気づけられて主とともに歩みつづけるよう励まされるなら、私にとつてこれ以上の喜びはありません。そしてそれは、主が用いられたさまざまな経験に対する十分な報いとなります。

一九八六年一月

M・ベツコン

「足もとにすわって」に寄せて

「足もとにすわって」に寄せて

愛するベッコン姉妹が長年にわたって、みことば誌のために「婦人メモ」を書いてくださったことは、私をはじめ多くの読者の喜びでした。このたび、それを一冊の本にして、みなさんに送ることができるととてもうれしく思います。

ベッコン姉妹は、主の足もとにすわって、さまざまな経験を通して学んだことを私たちと分け合ってくださいました。個人的な経験、家庭生活、亡きご主人の長い病気、聖書の人物——これらすべてのことにおいて、主ご自身の変わらない愛と恵みを教えられたのです。

どこを読んでも励まされますが、私がいちばん幸いに思うのは「七面鳥も」というところです。私たちの父なる神は、その子どもたちに、いつも、より良いものを与えて必要を満たしてくださるお方です。

一九八六年一月

G・スピッチリー

1 新年

1 新年

きれいにそうじされた家、みがかれた窓、入浴してさっぱりした体、着るばかりになつている晴れ着、そして台所には何日か前から用意されたごちそう。それらは私たちをさわやかで、すがすがしい気分してくれます。お正月の準備はいろいろと手がかかりますが、新年を家族一同でにこやかにを迎えることを考えると、これもさほど苦にならず、かえってはりきってしまうものです。

新年というものは気持ちも新たな出発です。すなわち、また新たにやってみる、あるいはやりなおしてみる、そういうチャンスの始まりかもしません。神様は時間を年に区分されたとき、この



ようなことを考えられたのではないでしようか。ふだんあくせくと働いている私たちが、ちょっと一息いれて、神様のことを考える余裕をもち、再び新たな気持ちで出発するチャンスとするために、神様は新年を決められたのではないでしようか。

しかし、これらの事のどれにもまさるのは、清められた魂を持つということです。私たちの体は、私たちのうちに住まれる神の聖靈の宮ですから、私たちはキリストの義を身につけなければなりません。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は眞実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」（ヨハネ一・9）。もちろん、年末になって初めて一年間の罪を告白し、清めていただくという意味ではありません。しかし、新しい年を迎えるにあたって、神様の前に自分を反省するということです。昨年おかした罪、よこしまな考え方、失敗、愚かなことのすべてが、主イエス・キリストの尊い血によって清められたことを感謝しつつ新年を迎えるのは、なんと幸いなことでしよう。

ダビデが詩篇三二篇一、二節で、「幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は」と歌ったとき、彼はこれと同じような経験をしたのではないでしようか。このことは、新年というものが、人生に対する新しい出発を意味していることを表していると思います。

ふつう、たいていの人は、農夫が鋤をもって田を耕すというようなことは、お正月には思いもしないでしよう。しかし、理由ははつきりしませんが、この原稿を書きはじめてから、このこと（鋤で耕すこと）が何度も私の心にうかんできました。たぶんそれは、鋤で田や畑を耕すことが、農夫にとつてはたいせつな年中行事だからではないでしょうか。農夫は毎年、春になつて、その年に初めて鋤を手にするとき、昨年よりも大きな意欲や希望を抱くにちがいありません。

キリストは、私たちの靈的な生活を、この鋤で耕すことにたとえられたのです。

新しい年のスタートにあたり、コリント人への第一の手紙一章三〇節を考えてみましょう。「キリストは、私たちにとつて、神の知恵となり、また、義と聖めとになられた」。ですから、私たちの中に主イエス・キリストがとどまっているならば、たとえどんな困難や誘惑がおそつても、私たちは大いなる収穫を得ることをキリストによつて約束されているのです。私たちが知恵に欠けているとき、彼は私たちの知恵となり、義に欠けているとき、彼は私たちの義となつてくださいます。

手に鋤をもつて新しい年を迎える。鋤は、りっぱな作物を育てるために、かたくかわいた大地をやわらかく掘りおこします。私たちもまた、愛・寛容・親切・善意・柔軟・自制などの御靈の実を生長させるために、いつも心をやわらかく、一番よい状態にしておかなければなりません。自分自身をいつも神様の愛の光のうちに置くように心がけましょう。